

アゼルバイジャン語、トルコ語と可能表現

青山和輝（東京大学大学院・日本学術振興会研究員 DC）

k.aoyama.macho@gmail.com

1. 可能表現の区分

本稿はアゼルバイジャン語とトルコ語に共通して見られる、可能をあらわす3表現について詳述する。両言語は系統的に同じテュルク諸語南西語群に属す、文法がよく似通った言語である。この2言語の可能形式の用法を比較することで、可能形式の言語内分布について考察する。

van der Auwera and Plungian (1998: 80) はモダリティ（可能と義務）を以下の4種に区分している。

表1. モダリティのタイプ

Possibility			
Non-epistemic possibility			Epistemic possibility (Uncertainty)
Participant-internal possibility (Dynamic possibility, Ability, Capacity)	Participant-external possibility		
	(Non-deontic possibility)	Deontic possibility (Permission)	

van der Auwera and Plungian 1998: Table 1.のうち、可能の部分のみ引用

本稿ではこれを左から「能力可能」「状況可能」「許可/禁止」「推量」用法と呼称する。すなわち、能力可能とは動作主体の内側に事態を発生させる要因がある場合について言うもので、状況可能とは動作主体の外側に要因がある場合について言うものである。

この定義からただちに、能力可能は典型的に動作主体についての属性叙述になりやすく、状況可能は動作主体以外（たとえば場所や道具）についての属性叙述になりやすいとすることができる。動作主体は前者では定、後者では不定になる傾向が予想される。しかし実際には、動作主体が定であり、かつ要因が主体の外側にあるような状況もあり、そのようないわば非典型的な状況可能を表現できるかどうか本稿の一つのポイントとなる。日本語で例示すると以下のようなになるだろう。

- (1) a. 典型的な能力可能 「夏休みにたくさん練習したけど、僕は泳げません」
 b. 非典型的な状況可能 「医者に禁止されてしまったので、僕は泳げません」
 c. 典型的な状況可能 「プールが壊れてしまったので、[誰も] 泳げません」

可能の形式は文法化研究史上、当初は一方向仮説に沿う形で「能力可能→状況可能」と図式化されていた。たとえば Bybee et al. (1994: 194) は ability→root possibility→permission という経路を挙げており、上述の van der Auwera and Plungian (1994) も基本的にそれを踏襲している。確かに KNOW や GET などの語彙項目から発達する可能形式にはその傾向が見られるが、日本語のラルやデキル¹、タイ語の dāy（高橋・新里 2005）など自発・出現をあらわす形式が状況（不）可能を介して可能一般を表すよう

* 本研究は JSPS 科研費 JP17J09752 の助成を受けている。

¹ ラルの出自については諸家のあいだで必ずしも意見が一致しないが、自発から派生したとする研究者も多い。Shibatani (1985: 839)、渋谷 (1993) などを参照。

になったとみられる例も実際には多く、このような異なる出自の可能形式が一言語内に複数発生することを想定すると、より複雑な絡み合いが起こることは想像に難くない。

本稿では形式ごとにアゼルバイジャン語、トルコ語における使い分けを調査してゆく。2 節では副動詞-A と動詞 *bil*-‘to know’に由来する形式、3 節では動名詞-*mAQ* と存在表現の組み合わせ、4 節では受身文について扱う。5 節は本稿のまとめ、6 節は展望である。

2. CV+‘KNOW’

副動詞-A と動詞 *bil*-‘to know’を組み合わせた形式は両言語で生産的に使われる可能表現である。

アゼルバイジャン語では-A *bil*-は能力可能(2)を基本として、許可/禁止(3)を表すこともできる。しかし状況可能にはふつう後述の-*mAQ ol*-を用いる。推量は例(4)に見るように肯定は言えるが、命題否定「～しないかもしれない」もモダリティ否定「～するはずがない」(澤田 2006: 第 8 章 3 節)も表せない。

- (2) Az. *Ayağ-ım-dan xəsarət al-dı-m. İndi üz-ə _____ bil-mir-əm.*
 foot-P.1SG-ABL harm get-PST-1SG now swim-CV know-PRES.NEG-1SG
 「足を怪我しました。今、私は泳げません」
- (3) Az. *Alma yi-yə _____ bil-məz-sən.*
 apple eat-CV know-AOR.NEG-2SG
 「リンゴを食べてはダメだよ」
- (4) Az. *Yağış yağ-a _____ bil-ir / *yağ-ma-ya bil-ir / *yağ-a bil-mir..*
 rain fall-CV know-PRES rain-NEG-CV know-AOR rain-CV know-AOR.NEG
 「雨が降るかもしれない」

一方トルコ語では-*Abil*-は、能力可能(5)、状況可能(6)、許可/禁止(7)、推量(8)のいずれにも用いられ、動作主体に制限も見受けられない。否定形は補充形-*AmA*-となるが、推量用法は命題否定のみで、補充形が期待されるモダリティ否定は用いられない²。

- (5) Tr. *Murat güçlü, yüz kilo-yu bile kaldır-abil-di.*
 Murat powerful 100 kilogram-ACC even lift-Abil-PST
 「ムラトは(力が)強い、100 キロさえ持ち上げられた」 (林 2013: 226)
- (6) Tr. *Bütün hazırlık-lar-ımız tamamlan-mış-ken, yol-a çık-abil-ir-iz.*
 all preparation-PL-1PL complete-PF-when road-DAT get.out-Abil-AOR-1PL
 'Now that all our preparations are complete, we can set out.' (Underhill 1976: 399)
- (7) Tr. *Bir şey sor-abil-ir mi-yim? 'Can/May I ask something?'*
 1 thing question-Abil-AOR Q-1SG (Göksel and Kerslake 2005: 302)
- (8) Tr. *Bugün yağmur yağ-abil-ir. 'It may/could rain today.'*
 today rain fall-Abil-AOR (Göksel and Kerslake 2005: 302)

² 例外的に動詞 *ol*-と組み合わせた形式 *ol-amaz* が推量モダリティ否定を表す。詳述する紙幅がないが、推量用法はそれ以外の 3 用法とは異なる構造的位置を占めており、工夫すれば以下のように、2 つの否定が目に見えて区別できる。

- | | | | | |
|-------|---------|-------------------|--------------------|--------------------|
| (i) | 基本 | <i>Gör-müş</i> | <i>ol-abil-ir.</i> | 「(彼は) 見たかもしれない」 |
| (ii) | 命題否定 | <i>Gör-me-miş</i> | <i>ol-abil-ir.</i> | 「(彼は) 見なかったかもしれない」 |
| (iii) | モダリティ否定 | <i>Gör-müş</i> | <i>ol-amaz.</i> | 「(彼は) 見たはずがない」 |

3. VN+'BE'/'EXIST'

動名詞と存在表現を組み合わせた形式は、動詞 *ol-* 'to be/become' を用いるものと存在文 *var/yok* によるものの2形式がある。

アゼルバイジャン語では *-mAQ ol-* が状態可能、許可/禁止に用いられる。この構文ではふつう例(9)のように主体が不特定（総称的）だが、例(10)のように与格項³で主体を明示することもできるため、非典型的な状態可能を表せる。その場合も能力可能は表さない。肯否による非対称はなく、その点よく慣習化しているが、現在形および中立形でのみ利用可能で、過去形は非文となる。

(9) Az. *Burada siqaret çək-mək ol-maz.* 「ここでは煙草を吸えない／禁煙」
 here cigarette draw-VN be-AOR.NEG

(10) Az. *Mənə siqaret çək-mək ol-maz.* 「私は煙草を吸えない（禁じられている）」
 1SG.DAT cigarette draw-VN be-AOR.NEG

存在文を用いた *-mAQ var/yox* といった表現をこれの代わりに用いることはできない。

一方、トルコ語ではこの種の形式は肯否による用法のずれが大きい。否定存在文 *-mAkyok* は、ちょうど英語の *No smoking.* のように禁止・典型的な状況不可能を表す (van Schaaik 1994: 45-46)。

(12) Tr. *Burada şapka çıkar-mak yok.* 'It is not allowed here to take your hat off.'
 here hat take.off-VN Exist.NEG (van Schaaik 1994: (34c); グロス一部変更)

一方、肯定形は全く使われる場面が異なる。ディリック (2016) はイスタンブール方言（≒標準語）で *-mAk var* が（反実仮想のような）話し手の意志(13)を表すこと、チャナッカレ方言で話し手の推量(14)をあらわすことを報告している⁴。前者はふつう過去形で使用され、現在形の用例は少ないが、後者は過去・現在・未来を自由に表すことができ、より文法化が進んでいるとされる。

(13) Tr. *Şimdi sen-in-le ol-mak var-dı.*
 now 2SG-GEN-with be-VN Exist-PST
 「今、君のそばに居たかったのに」

(14) Tr.C. *Ni iç-iyo-n öle... ğara ya u...*
 what drink-PRES-2SG as.such black PTCL that
Çay-a benze-me-yo. Kola iç-mek vā-sın..
 tea-DAT resemble-NEG-PRES cola drink-VN Exist-2SG

「何飲んでるの、黒い……紅茶じゃないようだ。コーラを飲んでるんでしょう」

(ディリック 2016: (3)および(18); グロス・訳は引用者が一部変更)

³ 動詞 *ol-* を *become* の意味で用いるとき、変化先は主格 (-Ø) で示される。従ってこの与格項は動詞 *ol-* によるものではなく、この構文に可能の意味が定着したのち applicative として付加したものと考えられる。

⁴ Hinnenkamp (1982: 123) は Tarzanca という、外国人に向けたトルコ語発話の一種に *-mAk var/yok* 構文が見られることを報告している。ただ、この場合はフォリナートークのなかで動名詞 *-mAk* が動詞の代表形として使われているというだけで、本文中で述べた形式と直接的なかわりはないものと思われる。

(i) *sen çay iç-mek var*
 you tea drink-Inf Exist
 'Do you (want to) drink tea?' (Hinnenkamp 1982: 123)

なお、このトルコ語の *-mAk vardı* は映画や歌詞などによく見られるが、義務形 *-mAll* で言い換えられる文脈も多く、モダリティとして可能とまとめて扱える可能性もある (cf. *olmalıydım* 「いるべきだったのに」)。一方、*-mAk ol-maz* は *-mAk yok* と同様に禁止・状況不可能をあらわすが、肯定形 *-mAk ol-ur* は *-mAk var* に相当するとは言えず、置き換えると奇妙に響く (つまり慣習化していない)。

- (15) Tr. *Bu masa benim için hazırlan-ma-mış. Şimdi ye-mek ol-maz.*
 this table 1SG.DAT for be.prepared-NEG-PF now eat-VN be-AOR.NEG
 「この食事は私のために用意されたものではない。今は食べられない」

4. PASS

トルコ語では受身文から可能の意味が生じることがある。状況可能、許可/禁止を表す。前節の *Az. -mAQ ol-* と異なり動作主体を明示する手段はなく、非典型的な状態可能を表すことはない。

- (16) Tr. *Cevap yaz-mak için kağıt-la kalem kullan-ıl-ır.*
 answer write-VN for paper-with pencil use-PASS-AOR
 'Paper and pencil may be used to write the answer.' (Underhill 1976: 331)

- (17) Tr. *Bura-ya gir-il-mez.*
 here-DAT enter-PASS-AOR.NEG
 'Do not enter; One does not enter here.' (Underhill 1976: 331)

いずれの例文でも中立形 (AOR) が用いられている点に注意されたい。中立形はトルコ語においては属性叙述をあらわす形式であり (青山 2014 第 3 節)、例(16)は中立形であるため、主語に関する属性叙述と解釈され、その結果可能の含意が生じるものと考えられる。実際、中立形以外の受身文からは可能の意味が生じず、たとえば過去形では過去に生じた一回きりの出来事が叙述される。動作主体は典型的には 1 人称複数と解釈される。例(18)は Nakipoğlu (2001) によると同じ意味のパラフレーズである。

- (18) Tr. a. *Dün iki saat koş-ul-du.* 'Yesterday it was jogged for two hours.'
 yesterday two hour jog-PASS-PF
 b. *Dün iki saat koş-tu-k.* 'Yesterday we jogged for two hours.'
 yesterday two hours jog-PF.1PL (Nakipoğlu 2001: (16))

一方、アゼルバイジャン語では受身が積極的に可能をあらわすことはない。これには複数の要因がかかわっていると考えられる。ひとつは、自動詞受身を構成することができないため、そもそも例(19-Tr)に対応する例(20)が非文になってしまうことである。

- (19) Tr. *Nasıl milyoner ol-un-ur?*
 how millionaire become-PASS-AOR
 Az. *Necə milyonçu ol-maq ol-ar?*
 how millionaire become-VN be-AOR
 「どうしたら億万長者になれますか／億万長者になるには」
 (20) Az. **Necə milyonçu ol-un-ur /ol-un-ar?*
 how millionaire become-PASS-PRES become-PASS-AOR

もうひとつの根本的な要因は、アゼルバイジャン語の「中立形」⁵はトルコ語とは異なり、単独では⁶属性叙述に用いられないという点で、これにより潜在可能の含意が出てこないものと考えられる。

(21)	Tr.	Mehmet	sigara	iç-er.	「メフメトは煙草を吸う人だ」
		Mehmet	cigarette	drink-AOR	
	Az.	?Elmin	siqaret	çək-ar.	「エルミンは煙草を吸うだろう/*吸う人だ」
		Elmin	cigarette	draw-AOR	

5. まとめ

以上を表 2 にまとめる。濃い斜線のセルはどの時制でも用いられること、薄い縦縞のセルは現在形、中立形、未来形に限られること、格子模様のセルは主に過去形で用いられること、白いセルは当該形式が可能用法をもたないか非文であることを示す。この表には各節で述べた形態統語的な差異と動作主体の定性、3 節で述べたチャナッカレ方言の意志用法、4 節で述べた自動詞・他動詞の情報が反映されていないことに留意。

表 2. 両言語における可能表現の形式と意味の対応表

可能形式	アゼルバイジャン語				トルコ語				
	能力	状況	許/禁	推量	能力	状況	許/禁	推量	
CV+'KNOW' -Abil-	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	肯 否
VN+'BE' -mAQ ol-	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	肯 否
VN+'EXIST' -mAQ var/yok	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	肯 否
PASS -Il/n	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	斜線	肯 否

本稿のデータのうち出典のないものは、アゼルバイジャン語はアゼルバイジャン共和国出身 20 代女性 2 人、トルコ語はトルコ共和国出身 50 代女性 1 人のネイティブチェックを経ているが、特にアゼルバイジャン語では書き言葉と話し言葉に乖離があるようで、レジスターを分けて調査する必要があるかもしれない。

⁵ そもそもトルコ語の-(V)r を「中立形」とか「超越形」とか呼ぶのは、この接辞が特定の時間に縛られない用法をもつ点に着目しているわけで、その用法を欠くアゼルバイジャン語の-Ar を「中立形」と呼ぶのはいかにも実態を伴わない命名だが、日本で出版されている松長 (1999) は「超越形」としているし、Schönig (1998: 254) も、アゼルバイジャン語の-İr と-ar はちょうどトルコ語の-lyor と-(V)r の関係によく似ている旨述べているので、ここでは名称を言語間で統一した。

⁶ 2 節・3 節でみたように、他の可能形式と中立形を組み合わせると属性叙述のような意味合いが出てくる。現在形と中立形のニュアンスの違いを詳述する紙幅はないが、現在形の-A bil-ir は actual な事態を表し、しばしば頻度副詞と共起するのに対し、中立形の-A bil-ar は単に可能性について述べる。トルコ語の現在形と中立形については青山 (2014) も参照。

6. 展望

第一に、両言語において、義務を含めたモダリティの全体像を描かねばならない。

第二に、本稿ではテュルク諸語南西語群に属する2言語について考察したが、諸語全体のモダリティについて有機的なつながりを捉えていくことも肝心である。諸語内の言語は典型的に多くの特徴を共有しており (Johanson 2002: § 1.4 など)、モダリティ形式もかなり似通った構文をとる。Rentzsch (2011) が詳しい。このような研究を基盤に意味論的考察を深めていく方向性も考えられる。

第三に、ディリック (2016) がトルコ語チャナッカレ方言について報告するように、口語や方言には書き言葉には見られない多様性があると考えられる。拙速に対照する言語を増やすのではなく、一つの言語を方言まで含めてじっくり煮詰めるという方向性もある。

縮号

ABL 奪格 AOR 中立形 CV 副動詞 DAT 与格 GEN 属格 LOC 所格 NEG 否定 NOM 主格 P 所有 PASS 受身 PF 完了 PL 複数 PRES 現在形 PST 過去 PTCP 分詞 PTCL 小詞 SG 単数 VN 動名詞

参考文献

- 青山和輝. 2014. 「トルコ語の非人称受身について: テンス・アスペクト・モダリティ形式との相互影響」『東京大学言語学論集』 35, 1-20.
- Bybee, Joan. Revere Perkins, William Paugliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. University of Chicago Press.
- ディリック, セバル. 2016. 「トルコ語における存在表現の文法化」『日本言語学会第 153 回大会予稿集』, 318-323.
- Göksel, Asli., and Kerslake, Celia. 2005. *Turkish*. London/New York: Routledge.
- 林徹. 2013. 『トルコ語文法ハンドブック』東京: 白水社.
- Hinnenkamp, V. 1982. *Foreigner Talk und Tarzanisch: Eine vergleichende Studie über die Sprechweise gegenüber Ausländern am Beispiel des Deutschen und des Türkischen*. Hamburg: Buske.
- Johanson, Lars. 2002. *Structural Factors in Turkic Language Contacts*. Routledge.
- 松長昭. 1999. 『アゼルバイジャン語文法入門』東京: 大学書林.
- Nakipoğlu, M. 2001. The referential properties of the implicit arguments of impersonal passive constructions. Elgüvanlı-Taylan, E. ed. *The Verb in Turkish*, John Benjamins, 129-150.
- Rentzsch, Julian. 2011. Issues of grammaticalization in Turkic modal construction. *Acta Orientalia Hungaricae* 64/4, 453-474.
- 澤田治美. 2006. 『モダリティ』東京: 開拓社.
- Shibatani, Masayoshi. 1985. Passives and Related Constructions: A Prototype Analysis. *Language* 61/4, 821-848.
- Schönig, Claus. 1998. Azerbaijani. Jans Johanson and Éva Á. Csató. Eds. *The Turkic Languages*. London/New York: Routledge, 248-260.
- 高橋清子、新里瑠美子. 2005. 「日本語とタイ語の出現動詞の文法化」『日本認知言語学会論文集』 5, 197-207.
- Underhill, Robert. 1976. *Turkish Grammar*. Cambridge, MA: MIT Press.
- van der Auwera, Johan and Vladimir Plungian. 1998. Modality's Semantic Map. *Linguistic Typology* 2. 79-124.
- van Schaaik, G.J. 1994. Turkish. *Typological Studies in Negation* [Typological Studies in Language 29], 35-50.